硫黄山の出火

蔦谷大輔
（県民生活文化課 県史編さんグループ非常勤嘱託員）

1916（大正５）年９月の岩木山神社境内の図（青森県史編さん資料）

ご存じの通り、岩木山は標高1625㍍の成層火山である。現在のような三峰の形状になったのは約1万年前のことと推定されている。江戸時代の日記や歴史書などを見ると、実際にあったかどうか不明なものも含めて、16世紀後半以降に発生した火山活動のことが記されている。岩木山は、聖なる山として弘前藩の人々から崇敬されており、黒煙を出しながら火を噴く山の姿は岩木山の異変として特に注目が集まったのであろう。

さて、19世紀に入ると、岩木山の火山活動による現象として硫黄山（硫黄平とも）の出火が頻繁に発生した。硫黄山とは、その名の通り火山活動によって生成された硫黄が地表に露出している地域を指し、現在の嶽温泉の温泉地から岩木山頂へ向かう途中の山腹辺りにあったようである。古代以来、硫黄は天皇への献上品や中国への輸出品などとして重宝されており、商品価値の高い鉱物だった。そのため弘前城下の商人らは、しばしば藩に硫黄山での硫黄の採掘許可を願い出て、採掘をおこなっていた。

硫黄山の出火とは、硫黄山の付近に新たな噴火口が形成され、そこからの出火が硫黄山に延焼したものといわれる。この出火の影響により、風向きによっては硫黄の焼ける臭いが弘前城下にまでただよってきたという。出火の様子は麓の村々のほかに弘前城下からも見え、岩木山の山肌から青い炎が出ている姿は、藩内の人々に動揺を与えた。

出火が確認されると、藩はただちに近隣住民に消火作業を命じた。1856（安政3）年4月17日、岩木山から煙が出ているのが確認された。同日夜には青い炎も確認されたことから硫黄山の出火と判断され、すぐに藩へ通報された。夜中のうちに、藩は、消火作業のための人員を派遣させた。消火作業は、近くの沢をせき止めて溜池を作り、その水を水桶で汲んで、バケツリレーの要領で運んで水をかける、という形がとられた。作業の途中で硫黄の煙がたちこめてきたため、それを除けながら作業したという。18日の夕暮れ、消火作業は終了し、藩へもその旨が報告された。

なお、硫黄山の出火によって藩内の人々に大きな被害は一度も出たことはなかった。それにもかかわらず、藩は多くの労働力を用いて急いで消火させていたのは、岩木山の異変が藩内に伝わることで、人々に動揺が広がるのを恐れたためと考えられる。

また、現在の岩木山神社の社務所のところにあった真言宗百沢寺では、消火作業終了後に鎮火の祈祷ではなく国家安全の祈祷がおこなわれたという。岩木山の異変はまさに国家（弘前藩）の危機を予兆するものとして捉えられていたのであって、被害の有無にかかわらず藩内の人々が総出になって対処していかなければならないもの、と認識されていたのである。